

奈良県立図書情報館報

うんてい

平城遷都
1300年祭
2010年開催公式マスコットキャラクター
せんとくん
©Heijo-kyo 1300th Anniv.

(うんてい復刊) 第2号

平成 22(2010)年 3月 14日



Contents

- ・ 巻頭のことは「謹呈、恵存、挿架……」・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
- ・ 所蔵資料紹介「和州奈良之絵図 解説」・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
- ・ 奈良県立図書館開館 100 周年「県立図書情報館までの歩み」・・・・・・ 3
- ・ 地域資料から『文政第四辛巳記—南都楽人の日記—』・・・・・・・・ 6
- ・ 館種を超えた連携“広がる大学図書館との連携”・・・・・・・・ 7
- ・ 奈良のもの・ひと② 古都奈良の洋館・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
- ・ レファレンス事例紹介<第2回>・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
- ・ 超！図書館！事業展開の軌跡・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
- ・ 奈良県立図書情報館と中国陝西省図書館とが友好協定を締結・・・・・・ 12
- ・ 受賞報告 ライブラリー・オブ・ザ・イヤー 2009 優秀賞受賞！・・・・・・ 12

巻頭のことば

謹呈、恵存、挿架・・・・

奈良県立図書情報館館長 千田 稔

自分の本をどなたかに差し上げるときに、あるいはいただくときに、どのように書くべきか、書かれているかは、むずかしく考えると、確かにやっかいなことなのだ。私も確固たる自信がないので、差し上げる場合は「謹呈」で通している。無難なようであるからだ。「恵存」は注意した方がよいようだ。最近では「恵存」と書いていただくことも、たまにはあるが、もともとの意味は「とっておけよ」というぐらいの意味で、目上から目下に差し上げるような場合に使われるべきだという。そうではなく、「おそばに置いてください」というニュアンスだという解釈もあるが、私はめったに使わない。そこで目上の人に本をさしあげるのに「挿架」という言葉もある。「どうぞ書架の片隅にでも」という気持ちを表している。私は、めったに使わない。何か、物知り顔のような印象を相手に与えはしないかとためらうからである。

さらに、差し上げる相手の名前の書き方である。これは、姓名を本来書かないのが原則である。姓だけが基本的には正しい。つまり「〇〇(姓)先生(様)」と書くことによって

「〇〇(姓)」という人は、わざわざ姓名で呼ばなくとも、世界に一人しかいない立派な人だということになるらしい。私は学生時代に恩師からそのように教わった。だから、後輩から「恵存 千田 稔先生」と書いて、時たま本を頂戴すると、とまどうが、言葉は時代とともにうつろうものだとすれば、目くじらたてることもないと思うようにする。かつて恩師から「恵存 千田 稔雅兄」として、ご高著をいただいたことがある。「雅兄」も本来悪い意味ではなく「風雅の道の先輩」ということなのだが、恩師は「勉強もせず遊んでいる人間」に使うのだと、半ば真顔で言われたことがある。

所蔵資料紹介

わしゅうならのえず 和州奈良之絵図 解説

絵図屋庄八が、中沢八兵衛の彫刻で元治元(1864)年に発行した奈良の名所案内図(47×63cm)で、天保15(1844)年の「和州奈良之図」の改訂版である。絵図屋庄八は奈良にあって代々地誌類や絵図を出版販売していた店舗として著名である。

奈良の絵図は、古くは宝永版や安永版のように東を上にした縦長図であったが、これを横長図に改めた天保版の絵図を踏襲し、サイズは天保版より少し大きくしている。図面左に南都七大寺の寺院名や奈良八景の名所旧跡を列記している。その上には春日大宮御祭、同若宮御祭礼や薪能、それに二月堂や大仏殿で行われる行事を一覧にして説明を付け加えている。また、羅針盤をかたどった円形を12の方角に区切りその方角の名所を記入し、奈良の橋本町からの里数を記入している。大仏殿の左には、「聖武天王御勅願所也、御たけ五丈三尺五寸、御堂高サ十五丈六尺、東西卅二

間南北二十八間、くわいろう(廻廊)東西九十間南北百間也、但南向」という説明を加えている。

西大寺・法隆寺・小泉などは実際の距離よりも接近して示し、里数を注記して相互関係を表すなど、宝永版・安永版より名所案内用の地図としての利用度を高めている(西田興四郎「奈良の古地図」『奈良叢記』所収)。

一方、天保版では、絵図の下段(西)に主要な地域への道程や南都七大寺を列記していたが、本絵図は左側に絵図以外の情報をまとめ、絵図の東西の紙幅を広くしている。また、木版印刷の彩色法の一つである合羽刷りで、奉行所・代官所跡・僧坊・寺院などに黄色、名所名や主な寺社の建物に赤色の彩色をして見やすくしている。明治12(1879)年の改訂版もあるのでこの絵図はかなり好評であったようである。

(大宮 守友)

参考：仲川明、森川辰蔵編『奈良叢記』1942年

吉海直人「『絵図屋庄八』について—近世以降の奈良出版文化史管見」

(『同志社女子大学学術研究年報』1993年)

■ 奈良県立図書館の創設と開館

明治5(1872)年、文部省は、東京上野に書籍館ショウジヤクカンを開設した。これが、わが国最初の近代図書館といわれている。以後、全国各地で図書館が創設され、明治30年代になると各府県立図書館の建設が相次いだ。

こうした中で、県知事河野忠三は、明治38(1905)年12月の通常県議会に、日露戦捷センショウ記念事業の一つとして県立図書館建設計画案を提案し議決された。これを受けて文部大臣あて設置申請書を提出し、翌39(1906)年2月23日付で設置が認可された。



興福寺境内にあった図書館の全景

この計画案によれば、建設場所は、奈良公園内興福寺境内の一隅を無償借地することとし、設立目的は、「新旧図書を備付し、広く衆人に縦覧せしめ、以て文化の開発に資し、尚戦病死者の肖像遺物履歴等を陳列保存し、又古文書を蒐集して其散逸を防がんとす」ということにあった。

建物の設計は県技師橋本卯兵衛が行い、予算は明治39年度から3ヵ年継続で、総額30,684円余をかけている。外観は日本古式に模し、内部は洋風を取り入れた和洋折衷の木造二階建てで、建築延面積233坪余(約770㎡)。階上に記念室、特別室、婦人閲覧室、階下に普通・児童・新聞の各閲覧室、事務室、応接室、巡回文庫整理室、休憩室を設け、収容人数は174人、書庫は耐火煉瓦造二階建て、5万冊収容可能となっていた。

明治41(1908)年10月30日、建物が竣工されるが、同年11月の陸軍特別大演習で軍が統監部として使用したため開館が遅れ、明治42(1909)年11月1日に開館式を行っている。

一般利用者の閲覧が開始されたのは、翌11月2日からであった。年間の開館日数は340日前後であったという。また図書の館外貸出は、直接国税3円以上の県民、官公吏及び官公立の学校職員と制限が設けられていた。また、開館2年目からは巡回文庫活動を開始しており、40～50冊入る木製携帯書庫を使い県内の10カ所余の施設へ貸出していた。青年団が受け取りに来たり、運送業者を使って搬送する方法がとられた。

■ 大正・昭和前期の奈良図書館

大正期になると制度や運営も軌道に乗りはじめた。開館5年目になると蔵書数も25,000冊余になり、図書館らしい形態を備えるようになった。閲覧者は1日平均140名程度で、2、3月には1日平均170名もあったという。

一方、読書推進に関わる文化活動にも取り組むようになり、大正6(1917)年には「南都古版本並摸板展覧会」を開催し、翌7年には第1回読書会が始まっている。また、10(1911)年には奈良県図書館協会が発足し、日本図書館協会主催の第16回全国図書館大会が、本館と県公会堂を会場に開かれ、全国から関係者160名の参加があった。なお、同12(1912)年1月には『図書館月報』を発刊している。

大正期後半になると、文部省の指示に基づいて、県でも「通俗図書館施設要項」を示し、市町村立図書館設置を奨励している。また、同年4月、本館は名称を奈良県立奈良図書館とし、これまで郡立等であった高市教育博物館附属・磯城・宇陀・宇智・吉野の5館を県立に移管した。県内の図書館の設置数は、明治44年に9館であったが、大正10(1911)年に23館に増え、昭和7年には86館に達している。このような中、昭和8(1933)年には中央図書館制度を骨子とする図書館令の大幅な改正があり、翌9年に奈良図書館は奈良県立中央図書館に指定された。

■ 戦時中の県立図書館

【檀原文庫の開設】

昭和15(1940)年は、皇紀二千六百年に当たり、奉祝記念事業が全国各地で行われた。旧檀原文庫の前身である檀原文庫は、その記念事業で造られた檀原道場の関連施設として開設された。



榎原図書館

建物は、天理教会本部から献納されたもので、和風の木造コンクリート一階建て、延建坪 291.2 坪 (961 m²) で、蔵造り仕様の書庫部分は 60,000 冊収蔵、防湿防火の二層壁となっている。同年の 2 月に竣工し献納式が執り行われ、8 月 1 日から閲覧を開始した。

館内には、天窓のある玄関ホール、閲覧室 (64 席)、新聞雑誌閲覧室や研究室等が設けられた。開館当初の蔵書は約 6,000 冊。「古今内外ノ図書及ビ特ニ肇国史ニ関スル書籍ヲ蒐集保存シ之ヲ広ク一般ノ閲覧研究ニ供シ…日本精神ノ涵養ニシス」ことを目的としており、大修養道場の精神文化の中核とされた。

榎原史談会をおき定期講演会を催す他、短歌会、文化講演会など、様々な文化活動も行っていった。

なお、昭和 15 年 11 月に、榎原文庫、建国会館や天理中学校、奈良県公会堂を会場とする全国図書館大会の開催が準備されていた。しかし、当局の指令により中止となり、「幻の大会」となってしまった。

【戦前・戦時下の奈良図書館】

昭和 12 (1937) 年の日中戦争では、館員にも応召される者が出てくる。こうした時代であったが、奈良読書会、奈良県人文庫、成人講座をはじめ、年賀状展覧会や大和名所誌展覧会なども行っており、昭和 13 (1938) 年 2 月 27 日には入館者 521 名、閲覧図書冊数 1,757 冊と開館以来の最高記録を出している。しかし戦時色が緊迫化する中、昭和 15 (1940) 年 12 月には、階上の研究室が、大政翼賛会奈良県支部の事務室として使用されるようになった。

昭和 16 (1941) 年 12 月 8 日、わが国は太平洋戦争に突入するが、この日館内に報道受信用のラジオを設置している。戦争が長期化する中でその影響は各方面に及び、同 18 年には時局研究読書会なども行われるようになる。戦時中の出来事として、県警察部の特高課が所蔵の河上肇、高島素之、美濃部達吉、津田左右吉らの図書を「危険図書」として押収するということもあった。

昭和 20 (1945) 年に入ると、臨時態勢として図書

館前の広場に防空壕や貯水槽池が掘られた。また戦禍をさけるため貴重図書の疎開が行われ、東里村須川、東市村八島、平城村押熊 (いずれも現奈良市) に分散して運ばれた。さらに、階下の一部は奈良県国民義勇隊本部となり、図書館本来の業務は縮小のやむなきにいたった。

■ 戦後の県立図書館

昭和 20 (1945) 年 8 月 15 日の終戦を迎え、わが国の民主化は連合軍最高司令官総司令部 (GHQ/SCAP) によって急速に進められた。奈良県でも、昭和 22 (1947) 年 1 月、GHQ/SCAP から図書や雑誌の提供を受け、館内の一室に CIE 図書室が併設された。

昭和 22 (1947) 年 5 月には日本国憲法が施行され、憲法の精神にもとづいて教育基本法をはじめとする新制度がつぎつぎと打ち出された。24 年には社会教育法が成立し、「図書館法」も翌 25 年 4 月に公布、7 月に施行された。

本県でもこれにもとづき、昭和 26 (1951) 年 3 月「奈良県立図書館設置条例」及び「奈良県立図書館協議会条例」が同時に公布施行された。この設置条例によって、図書館とは「図書記録その他必要資料を収集し、整理し、保存して一般公衆の利用に供しその教養、調査、研究、レクリエーション等に資する」施設であることが定義づけられた。また昭和 26 (1951) 年 7 月には、図書館協議会条例による協議会が設置された。

また、同年 11 月からは日本十進分類法による図書の分類切替作業を開始し、翌昭和 27 (1952) 年には、開架方式を採用した。同年 7 月、地域資料の収集にあたる拠点として郷土資料室を開設した。このほかに、県内各地域への図書館支援サービスである巡回文庫が、昭和 29 年から自動車で行われるようになった。

【榎原文庫から榎原図書館へ】

昭和 45 (1970) 年 4 月に榎原文庫は「奈良県立榎原図書館」と改称。この年、館内に「万葉文庫」を設け、「万葉研究会」が発足している。翌年には「万葉研究会」会報として『萬葉』が創刊された。児童サービスの面では昭和 47 (1972) 年 10 月に「親と子と本の会」が発足、夏のつどいなどを開催して利用者との交流がはかられた。

館外サービスでは、昭和 48 (1973) 年に巡回文庫活動が開始されている。サービスは主に奈良県の中・南和地域を担当し、図書館未設置地域や山間過疎地域の公民館等への配本サービスを行った。なお、榎

原図図書館の中で特別コレクションとしては、万葉文庫と辰巳文庫が置かれていた。

【文化会館時代の奈良図書館】



奈良図書館

●館内サービス

昭和 43 (1968) 年 6 月、文化会館内に併設された新図書館が業務を開始した。児童奉仕においては昭和 43 (1968) 年 11 月に児童室での「おはなしのじかん」が開始され、平成 16 (2004) 年 12 月までの間、数多くの児童が参加し、楽しい時間を過ごした。県立図書館の新しい機能の一つとしてレファレンスサービスが始まったのは、昭和 49 (1974) 年 7 月からである。専任職員をおいてレファレンス用のリストや索引などの整備が進められた。また、この時期所蔵資料の目録編纂作業が集中して行われている。編纂作業の成果は『奈良県立奈良図書館蔵書目録』全 3 巻と『奈良県立奈良図書館郷土資料目録』として結実した。

また、この時期、「石上宅嗣卿薨去 1200 年祭」、「本でたどるシルクロードの旅」、「生涯学習図書館講座」といった行事や講座を開催している。

●移動図書館配本から連絡車へ

80 年代になり、各地で市町村図書館が整備・充実される中で、県立の対県内図書館サービスも見直しを図ることとなった。県立図書館は図書館の図書館（第二線図書館）を目指し、移動図書館活動も、昭和 55 (1980) 年度から従来の地域・家庭文庫等への直接貸出は順次廃止し、かわって町村教育委員会とも連携をはかりながら地域の図書館、公民館図書室、隣保館等の公的な施設へ重点的に配本する方法へと切り替えた。

なお、この時期、奈良図書館は平坦部と東部地域、橿原図書館は中・南部地域というようにサービスエリアを分け配本活動を行った。

このような配本活動も、平坦部を中心とした市町村図書館の増加にともなう図書館間貸出の物流整備の必要性から、平成 10 (1998) 年度に図書館設置市

町への資料搬送と相談業務を担う連絡車によるサービスに切り替えた。

■新県立図書館に向けて

当館で最初に電算導入を行ったのは、昭和 64・平成 1 (1989) 年 4 月のパソコンによる図書の発注・整理システムであった。その後、平成 7 (1995) 年 3 月に新県立図書館整備基本構想が策定され、これに伴い奈良・橿原両館は、所蔵図書のデータベース化作業を開始することになった。データベース構築作業は、平成 7 (1995) 年度から平成 11 (1999) 年度までの 5 カ年計画で実施された。当館では、学術情報センター（現国立情報学研究所）の NACSIS-CAT に参加し、公共図書館としては初めての試みで作業を行った。なお、目録データベースの公開は平成 8 (1996) 年度から開始している。

さらに、古絵図のデジタル画像化、奈良県に関する情報や生活に関する情報をネットワーク上から収集し、検索するシステムである地域生活情報データベースの構築、古文書や公文書データベースの構築など、新図書館で提供するサービスのコンテンツ作りをこの時期から行ってきた。

こうしたなかで、平成 17 (2005) 年 3 月 31 日、奈良市大安寺西に建設された奈良県立図書館への移行準備のために、県文化会館内の奈良図書館と橿原図書館はそれぞれの活動に幕を下ろした。

【参考文献】

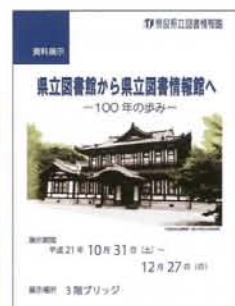
- 『奈良県立図書館小史』 1977年
- 『奈良県立奈良図書館報うんてい』 59, 60 1992-1993年
- 『橿原道場施設概要』 1941年 他

（戦前：森川 博之 戦後：鈴木 陽生）

●資料展示

「県立図書館から県立図書館へ —100年の歩み—」

平成 21 (2009) 年 11 月～12 月の期間、開館 100 周年を記念し、明治 42 (1909) 年の開館から現在までの足跡を年表・パネル・写真・当時の図書館用品によって振り返る資料展示を開催した。



『文政第四辛巳記—南都楽人の日記—』

奈良県立図書情報館は、公文書館機能をあわせ持つ図書館として平成17(2005)年11月に開館しました。そのため図書、雑誌の他に、県庁各課などから移管された公文書、寄贈、寄託、購入などにより得た県内の古文書、絵図を所蔵しています。

当館が所蔵する古文書の総数は、約23,000点です。古文書は、1点ずつ請求記号と資料IDを付与し、中性紙封筒に入れてあります。この封筒は古文書群ごとに中性紙紙箱に収め、館内の貴重書庫に収納しています。これらの所蔵データは当館のホームページから検索する事ができ、利用者の請求に応じ、閲覧に供しています。

当館所蔵の古文書は、葛下郡上牧村の牧浦家文書など県内の村方文書が中心ですが、この他に『庁中慢録』の編纂で知られる玉井家文書、片桐家代々記録、高取藩内藤家文書などの武家文書、興福寺福智院家文書などの寺社文書、符阪家・中条家文書などの町方文書、今西文庫などの収集文書と、多様な古文書を揃えています。この中に故藤田祥光氏が収集した藤田文庫があります。『奈良県立奈良図書館郷土資料目録』の解説によりますと、藤田氏は明治10(1877)年に生まれ、名を庄二郎、字を祥光と称しました。彼は著名な紙商であり、また歌人、郷土史家でした。54歳で家業を譲った後、昭和7(1932)年から20年間奈良のあらゆる事の変遷の調査を志し、生涯の事業として没頭、昭和25(1950)年8月に永眠しました。昭和26(1951)年7月に、遺族から編纂、手写記録類等223筆、文献資料394点が旧奈良県立奈良図書館に寄贈され、現在当館が所蔵しています。藤田文庫文献資料に『春日楽人玉手国当日記』文政第四辛巳年記』がありますが、これは『奈良県立奈良図書館郷土資料目録』へ載せられるに留まり、これまで知られていませんでした。

『文政第四辛巳年記』には「主税属玉手国當」と記されており、この記録の作者と考えられます(右図参照)。玉手国當を調べますと、彼が南都楽人であることが分かりました。近世の楽人は、京都、南都、天王寺の三方の楽所が合同で朝廷などの儀礼に従事し、江戸幕府から厚遇されていました。地下官人の履歴を網羅した『地下家伝』の「南都寺侍 玉手氏

号藤井」の項に、國當の履歴が見られます。これによりますと、玉手國當は明和6(1769)年に生まれ、天明5(1785)年12月26日の16歳の時に主計少属を任じられ、寛政10(1798)年12月20日に玉手へ

復姓しています。この事から、『文政第四辛巳年記』は玉手國當が52歳の時に、文政4(1821)年の動向を記した日記となります。玉手氏は藤井を号し、奈良の寺社行事で太鼓を打っていました。南都楽人の日記としては、氷室神社が所蔵する東家の日記、天理大学附属天理図書館が所蔵する芝家の日記がありますが、『文政第四辛巳年記』は新たに見つかった藤井家の日記です。

『文政第四辛巳年記』の目次には、法隆寺にて聖徳太子の1,200年忌を行う事、氷室神社にて降雨を祈るために1,000回音楽を奏する事、春日祭に楽所奉行の四辻様が来る事、春日若宮おん祭の事などが記されており、奈良の寺社行事の際に参勤した楽人の名前、奏した音楽、行事での様子が分かります。楽人は、興福寺、春日大社、東大寺、氷室神社、般若寺、法華寺、談山神社、生駒大社などの行事に参勤しました。また、毎月初めや五節句の際に氷室神社へ参勤しており、氷室神社が楽人の活動拠点であった事が窺えます。

江戸時代の南都楽人は、京都に住む家と奈良に住む家に分かれていました。京都に住む南都楽人は旧暦9月の氷室社例祭と旧暦11月の春日若宮おん祭に参勤することになっており、『文政第四辛巳年記』には窪近義、奥好古、辻近敦、上近興らが奈良へ下向した記述が見られます。南都楽人が合同で音楽を奏するのはこの2回だけであり、氷室社例祭と春日若宮おん祭が南都楽人にとって最も重要な祭りであった事が確認できます。

この他『文政第四辛巳年記』には、4月に井上左門が奈良奉行として赴任、6月に丹波守を受領、8月に大乘院門跡が出奔するなど、奈良で起った様々な出来事を記しており、当館が所蔵する貴重な古文書と言えます。

(北堀 光信)



館種を超えた連携 “広がる大学図書館との連携”

■ 図書情報館で大学の資料も借りられます

現在、図書情報館で、県内4大学の図書館が持っている資料も借りられるようになってきました。図書情報館のカウンターで申し込みをすると、一週間に一度の定期便で、大学の資料が図書情報館に届きます。利用される方の費用負担はありません。大学まで行かずに、便利で簡単に、学術的な資料を手にとることができます。

■ 協力大学および各館の蔵書の特徴

奈良産業大学図書館

…H20.12から

経済・経営・法律などの社会科学分野と情報関係の専門図書
(約20万冊)



奈良女子大学附属図書館

…H21.7から

女性問題を主とした社会科学・歴史を主とした人文科学の専門図書
(約52万冊)



奈良教育大学学術情報研究センター図書館

…H21.9から

幼児教育から生涯学習までの教育に関する幅広い専門図書
(約32万冊)



奈良県立大学附属図書館

…H21.10から

観光や地域づくりに関する専門図書 (約10万冊)

■ 相互の協力で1プラス1が2以上に

あらためて、図書情報館の資料の特徴をあげると、調査・研究や自ら情報を作り出す手助けとなる幅広い分野の一般書、専門書を約55万冊所蔵しています。特に歴史、文学（現代小説を除く）などが充実し、奈良県とその隣接地域に関する資料については、網羅的に収集を行っています。しかし、幅広いとはいえ、大学図書館が長年かけて専門的に収集した学術的資料には及びません。この貴重な学術的資料を、

図書情報館の資料とあわせて利用ができるということは、1プラス1が2以上に膨らむ素晴らしい協力です。

逆に、大学図書館の利用者は、図書情報館の資料を、大学図書館で利用することができます。大学図書館の資料とあわせて図書情報館の資料を使い、この奈良で新たな研究成果があがるということは、この相互の協力が大変有意義なものであると言えます。

■ 県内市町村図書館なども協力体制があります

ところで、この定期便での資料のやりとりは、大学との協力で初めて行ったものではありません。図書情報館となる以前から、奈良県立の図書館と県内の市町村の図書館などの施設との間ですでに協力の体制があります。図書情報館で、各市町村の資料を借りることも出来ますし、最寄りの市町村施設で申し込めば、図書情報館の資料はもちろん、他の市町村で持っている資料も借りることができます(※1)。奈良県立大学の資料については、今回の図書情報館との協力開始により、最寄りの市町村の施設でも借りることができるようになりました。

また、市町村の施設と、奈良県立大学については、図書情報館で直接借りた資料を返すこともできます(遠隔地返却※2)。

※1 図書情報館の資料のみの取り寄せとなる市町村があります。

※2 返却できない市町村があります。

■ 32の図書館の資料が一括で検索できます

さまざまな資料を見たいと思った場合、やはりどの図書館にどんな資料があるかを調べる必要があります。図書情報館のホームページ内に、上記の4大学を含め県内32の図書館の蔵書が一括で検索できる「県内図書館蔵書横断検索」を用意しています。
<http://opacsvr01.library.pref.nara.jp/cssys/index1.html>

県内の貴重な資料を有効に活用し、さらに知的情報を生み出すための道具として、このサービスを広く多くの方に利用していただきたいと思います。(サービスの詳細については、図書情報館へお問い合わせください。)

(高辻 亜由美)

どちらかといえば古代遺跡や神社仏閣のイメージの強い古都奈良ですが、奈良市内には、文明開化の明治を彷彿とさせる洋館が残っています。JR奈良駅や奈良国立博物館、奈良女子大学記念館などが時を経て日常の生活に溶け込んでいます。

ひとくちに洋館といっても、木造や石造りといった建築材料やデザイン、建てられた時期によってもその印象は大きく変わります。

日本における洋館建築は幕末の頃に始まり、明治に入ると、欧米から来日したお雇い外国人が日本の大工を指導し、全国の官営の建物、工場などを建てていきます。そして、これらの洋館を真似て地方都市でも地元の棟梁たちが洋館を建てるようになります。彼らの建築物は、日本の伝統的技法を用いつつ西洋建築の姿形やデザインを取り入れた和洋折衷の洋館でした。

やがて明治政府は建築の専門家を招聘し、設計や施行指導、監督を依頼し、本格的な洋館の建設に着手する一方で、建築設計者教育を始めます。イギリス人建築家ジョサイア・コンドルは、明治10(1877)年に工部大学校(今日の東京大学工学部)の教授として来日し、鹿鳴館をはじめ多くの建築物を手がけるとともに、最初の日本人建築家を育成しました。コンドルの教え子であり、日本人初の建築家でもある辰野金吾や片山東熊、さらにその下に続く多くの建築家によって次々と洋風建築が全国に建てられていきます。こうした建築の礎を築いたコンドルは日本近代建築界の父と称されています。

宮内省の建築家として多くの宮廷建築に携わった片山東熊は、赤坂離宮(現迎賓館)をはじめ、奈良国立博物館や京都国立博物館旧本館などを設計しました。

辰野金吾は、明治建築会のリーダーとして、日本銀行本店、東京駅など数々の有名建築物を手がけています。東京駅や京都文化博物館などにみられる赤煉瓦の建物に白い花崗岩を組み合わせた特徴的な意匠は、19世紀イギリスの様式をもとにアレンジされたもので、「辰野式」と呼ばれています。

赤煉瓦のイメージとは趣が異なりますが、奈良ホテルも辰野の作品のひとつです。

奈良市北部に残る赤煉瓦の洋館、明治41(1908)年に奈良監獄として建てられた現奈良少年刑務所は、辰野金吾の弟子にあたる建築家山下啓次郎の設計によるものです。

明治政府は従来の木造監獄の改良事業を進め、明治33(1900)年に欧米各国の建築法を取り入れた監獄建築計画を立案します。その第一着手工事として、奈良を含め5つの県で監獄建築が着工することとなりました。当時司法省技師であった山下は翌34(1901)年、奈良県から監獄工事監督を囑託されるとともに、監獄建築設計調査のため欧米に派遣されています。

奈良監獄正門の赤煉瓦に白い石の組み合わせ、正面の円窓、その上部と左右の円塔に組まれた煉瓦のデザインなど、その佇まいは、そこが監獄であるとは想像し難いような重厚な美しさを携えています。同時期に設計された千葉、金沢、長崎、鹿児島監獄とあわせて、これらは「明治の五大監獄」と呼ばれています。そして建築から100年を経てなお、奈良、千葉の両監獄は現役の刑務所として使用されています。



奈良少年刑務所正面

【主要参考文献】

- 『西洋館を楽しむ』 増田彰久 筑摩書房 2007
- 『洋館』 (さがしてみよう日本のかたち6) 日奔貞夫、中川武 山と溪谷社 2003
- 『洋館』 (日本の名景) 高井潔 光村推古書院 2001
- 稲澤宏典 「司法技師・山下啓次郎：近代建築における技術とデザインの展開」 (『日本建築学会大会学術講演梗概集F-2』 2008)
- 山田喜一 「矯正の赤煉瓦建築：奈良監獄誕生ノート」 (『刑政』 89巻7号)

(徳山 さおり)

◆ 一般資料から ◆

Q：タイトルは不明だが、賢い小ジカが洞穴にいるところをトラに見つかり、機転をきかせて難を逃れるというお話がある。その続きで、クマのしっぽが短くなった話があると聞いた。外国の民話をもとにした話らしいが、そのようなお話はあるか。

A：あらすじは何となくわかっているけどタイトルがわからない、ということはよくあります。絵本やお話の場合は、登場人（動）物や内容からキーワードを想定して探すことができます。

はじめに（小）ジカ、トラなどのことばを組み合わせ探しましたが、相当するお話は見つかりませんでした。よく似たお話で、ヤギ（またはシカ）がライオン（またはトラ）から身を守るために、機転をきかせてライオンを追い払った、というあらすじの民話がアジア地域を中心にいくつかありました。

つぎにクマのしっぽが短くなるお話については、『民話・昔話集内容総覧』に2件掲載されていました。ひとつはスウェーデンの民話で「くまのしっぽはどうして短くなったか」。たくさんの魚を得たキツネにクマが捕り方を教わりますが、キツネは「氷の穴にしっぽを入れて捕った」と嘘をつきます。クマは言われたとおりに自分のしっぽを氷の穴にたらししたところ、魚に食いつかれて切れてしまったというものです。もうひとつは大阪府摂津に伝わる民話で「熊の尾っぽの話」。やはりキツネの教えに従ってクマがしっぽで魚を釣ろうとしたところ、しっぽが切れてしまったということです。

民話や昔話は、登場人（動）物あるいは出来事が、地域や時代に合うようにアレンジされて伝わる場合があります。もしかしたら今回もそのようなケースかもしれない。はじめの小ジカとトラが登場するお話は当館資料では判明せず、クマのしっぽのお話が続編かどうかの確認はできませんでした。

【主要参考文献】

- 『民話・昔話集内容総覧』日外アソシエーツ 紀伊國屋書店 2003
- 『世界の民話』小沢俊夫 ぎょうせい 1976
- 『アジアの昔話』ユネスコ・アジア文化センター 福音館書店 1975-1981
- 『大阪の民話』二反長半 未来社 1959
- 国立国会図書館 国際子ども図書館

<http://www.kodomo.go.jp/index.jsp>

（川村 殉子）

◆ 地域資料から ◆

Q：本館HPに馬見村役場で兵士の召集事務に当たる兵事係が所持していたという木札の画像がある。自分は滋賀県の事例を調べているが、この木札は奈良県では一般的なもののなか。

A：馬見村は、現在の北葛城郡広陵町に明治～昭和期に存在した村の名前です。お尋ねの資料は、戦争体験文庫企画展示「軍隊と地域 2 村と軍隊-村役場/在郷軍人会-」で展示されていたもので、裏には「第四号 陸軍動員用急使 馬入村」と記され、表には「この急使は動員用書類を携行し最も重大なる任務を有するものなれば万一事故に遭遇したる時は何人を論ぜず最寄 寄 巡査駐在所又は村役場に急報すべし」と記されています。この木札の裏面の文章が役に立つとすれば、係員が書類を届ける途中で急病や事故にあい、路上でいざば行き倒れて意識すらない状態に陥ってしまった場合に限られます。

まず、一般的な傾向を調べるために、本館に所蔵されていた出版物を参照しましたが関連する叙述はありませんでした。そこで、本館所蔵の公文書をいくつか調べていたところ、北葛城郡役所文書に郡内の兵事行政担当者会議提出記録があり、関連する記述がありました。ここでは、令状配達人が出発する際は「時速約4キロで行進すること」「書類を汚さないこと」とあわせて、途中で病気になったら巡査などに言って代理を立ててもらおう手続きをすべき旨を、役場の責任者は配達人に口頭で訓示すべきと記しています。

趣旨としては木札の内容と似ていますが、木札のように配達途中に行き倒れてしまうような稀有なケースを想定してのものではありません。質問者にはこの資料を示し、「この木札が奈良県では一般的であったとまでは言えず、馬入村役場独自の工夫だった可能性もある」ことを回答しました。

【主要参考文献】

- 黒田俊雄編『村と戦争 兵事係の証言』桂書房 1988
- 『現行兵事法令集』内務省 1909
- 『上級官庁令達内訓々令告示告諭 当庁令達内訓々令告示告諭原議』北葛城郡役所文書 1917

（佐藤 明俊）

さらに詳しく知りたい方はこちらをご覧ください。

図書情報館にきいてみよう（URL：http://www.library.pref.nara.jp/reference/ref_example.html）

超！図書館！事業展開の軌跡

■ 館長公開講座「図書館劇場」



毎年度好評の千田稔館長公開講座「図書館劇場」、平成21年度は、平城遷都1300年を来年に控え『平城京をめぐる宮都マンダラ』をメインテーマに、奈良時代の都の変遷をたどり、遷都1300年の奈良の姿を浮き彫りにしています。

なお、本公開講座は毎回、奇数月の第4土曜日に開催し、館長講演、朗読、ゲスト講演で構成されています。

(各回のサブテーマ)

- 5月23日(土) 第1幕 「平城京と藤原氏－なぜ遷都したか」
- 7月25日(土) 第2幕 「吉野宮と茅渚宮－離宮の成立と廃止」
- 9月26日(土) 第3幕 「難波京と難波津－海のかなたへの憧れと不安」
- 11月28日(土) 第4幕 「恭仁京と紫香楽宮－大仏造立の序奏」
- 1月23日(土) 第5幕 「保良宮と由義宮－平城京衰退の予兆」
- 3月27日(土) 第6幕 「長岡京－なぜ平城京は廃都されたか」(予定)

また今年度から、本講座の熱心なファンの皆様方が館長を交えて充実した講習機会をもつ「図書館劇場友の会」が発足し、図書館劇場終了後、会員相互に情報交換する「館長文化サロン」を開いています。

■ 図書館寄席

「鹿乃芸亭(しかのうんてい)」

「大仏に、鹿の巻き筆、奈良晒、奈良茶、奈良漬け、奈良の噺家」笑いのコラボ、奈良から発信！

当館では、平成21年5月から、奈良市出身の落語家桂文鹿さんプロデュースによる寄席を定期的で開催しています。毎回多彩なゲストを迎え、古典から新作まで奈良にかかわりの深い作品などを、お楽しみいただいています。

また、落語家さんたちの奈良にまつわるトークや、出囃子の生演奏も楽しめる本格的な寄席です。



■ 講演会・シンポジウム

図書館情報館では、利用者の方にフレッシュでタイムリーな情報を発信するべく、各種講演会、シンポジウムを実施しています。今年度特に好評だったのは、平成21年12月13日に開催した

奈良県立図書館創立100周年・ライブラリー オブザイヤー 2009 優秀賞受賞記念特別企画 「魏志倭人伝を読む・纏向遺跡を掘る」でした。

このシンポジウムは、平成21年11月に当館が、奈良県立図書館創立100周年を迎え、ライブラリーオブザイヤー 優秀賞を受賞したのと時期を同じくして、纏向遺跡で卑弥呼の宮殿に関連すると思われる大型遺跡が発掘されたのを受けて、特別企画として専門家によるシンポジウムを開催しました。定員300名を大幅に超えての応募があり、急遽、館内でモニター中継を行いました。約750名のご参加をいただきました。



また、平成 21 年 11 月 21 日(土)～23 日(祝)には、奈良を考え図書館の新たな有り様を探るフォーラム、講演会、トークセッションの 3 日間連続イベント奈良県立図書館創立 100 周年記念「奈良を考える～図書情報館から考える 3 日間」を開催しました。



11月22日(日)

記念講演会 「現代社会における表現と図書館」
講師：内田 樹(神戸女学院大学教授)

■ 音楽のある図書館

図書情報館のエントランスホールを使って、クラシックを始めとする、様々な音楽コンサートを無料で開催しており、多数の方に楽しんでいただいております。

今年度、7月23日には「県立図書館創立100周年記念・ハイドン没後200年記念 ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブル弦楽四重奏の夕べ」でハイドンの名曲などのイブニングコンサートを、10月11日には「西谷牧人・伊東裕チェロデュオコンサート」と銘打ち地元奈良高校出身西谷さん(東京交響楽団首席チェロ奏者)と伊東さん(2008日本音楽コンクールチェロ部門第1位)の先輩後輩のデュオなどを開催しました。



ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブル弦楽四重奏の夕べ

■ 企画展示

奈良の情報発信、国際交流による資料連携など、さまざまな企画展を開催しています

【21年度の主な企画展示】

- 奈良からカプリモノ文化を世界に発信
「世界スマイル計画～チャッピー岡本のカプリモノとダンボール家具展～」

- 吉野で生まれたブロックおもちゃ
「LaQ(ラクキュー)フェスタIN奈良」
- 「世界のブックデザイン2008-2009」等

■ 各種相談会



世界スマイル計画
～チャッピー岡本のカプリモノとダンボール家具展～
ワークショップの様子



世界のブックデザイン 2008-2009

地域団体等とコラボして敷居の低い図書館ならではの無料相談会を定期的実施しています。

(1) 医療・健康相談会

済生会奈良病院瀬川院長の協力のもと、病気の知識の関する疑問や健康管理のためのアドバイスを、



専門家の立場から親身になって相談にのっています。

(2) 仕事無料相談会

奈良県経営者協会とタイアップし、脱フリーター支援や仕事や就業に関する不安、悩み、迷いなど個別具体的な質問にキャリアカウンセラーが相談にのっています。

(3) 経営無料相談会

「地域力連携拠点」奈良商工会議所との共催により、起業したい、経営課題を解決したい事業者専門家が相談にのっています。

(4) ITサポートデイ(パソコン相談)

当館のボランティアグループ「ITサポーターズ」の方たちが、IT機器の取扱い方法や、初めてパソコンに触れる方、もっと違ったことをしたい方等の相談にのっています。

平城遷都 1300 年を記念し、
奈良県立図書情報館と中国陝西省図書館とが
友好協定を締結



中国陝西省は、平城京がその都城のモデルとした唐の都「長安城」があったところです。奈良県では、2009年4月16日に友好提携に向けた覚書に調印し、交流を進めています。その流れの中、2009年、ともに開館100周年を迎えた図書情報館と陝西省図書館との間で交流を深めるべく、準備を進め、平城遷都1300年を記念し、平城京ができた710年3月にちなみ、2010年3月に友好協定を調印することとしました。

3月11日深更、奈良に到着した謝林陝西省図書館長一行は、12日午後、荒井正吾奈良県知事を訪問、友好協定締結の意向を報告された後、図書情報館にて、千田稔当館館長と謝林館長とが友好協定書を取り交わしました。

13日には、「友好協定締結記念シンポジウム」を開催し、西北大学国際文化交流学院王維坤副院長による「井真成の墓誌について」、謝林館長による「陝西省図書館の歴史」の基調講演と、当館千田稔館長をコーディネーターとして、パネラーに王副院長、菅谷文則奈良県立橿原考古学研究所所長、生駒基達薬師寺執事を迎えて、「長安城と平城京～文物の来た道～」について活発に意見交換しました。

歴史を通じて結びついた両館が、資料の交換はもちろんのこと、お互いの文化の交流、発信のため、動画を活用するなど最新の技術を織り交ぜながら具体的な協力を推進してまいります。

受賞報告
ライブラリー・オブ・ザ・イヤー 2009 優秀賞

NPO法人「知的資源イニシアティブ」(IRI)がこれからの日本の公共図書館のあり方を示唆するような先進的な活動を行っている機関に対して贈る“良い図書館を良いという!”「Library of the Year 2009」優秀賞に、奈良県立図書情報館が決定いたしました。

2009年は、第一次選考に残った18施設・団体・サービスの中から、当館および大阪市立中央図書館、渋沢栄一記念財団実業史研究情報センターの3機関が優秀賞に選ばれました。

当館は、奈良がもつ豊かな歴史と文化に着目し、伝統文化産業や関連NPOとの連携を進めるなど、従来の公共図書館サービスを越えた新たな歴史・文化との結びつきを模索し、成功している点が評価されました。

今回の受賞は、当館をご利用いただいている皆様方のご支持、ご協力の賜物と職員一同、心より感謝申し上げますとともに、今後、一層のサービスの向上に努めていきたいと思っております。



奈良県立図書情報館報 うんてい

(うんてい復刊) 第2号

発行日 平成22年3月14日

発行人 千田 稔

発行所 奈良県立図書情報館

〒630-8135 奈良市大安寺西1丁目1000

TEL.0742-34-2111 FAX.0742-34-2777